

# 春燈

2019 June

6月号



主宰の句

安立公彦

幾たびの春重ね来し城址かな

斑鳩の旅びと我に雁帰る

段々と春色浴ぶる走り根や

青き踏むとき青春の詩口うたに

永き日や荷風旧居の路地寂と  
(市川)





安住敦の句

来し方に悔なき青を踏みにけり

『古曆』昭和二十九年

敦先生は〈世にも暑にも真黙をもつて抗しけり〉と共鏡のようにこの句を詠まれたのではと推察します。春燈創刊よりほぼ十年、様々な困難を経て見事に俳壇の一角に独自の立ち位置を獲得した歎びと高揚感、そこに未来への秘めたる決意がきつぱりと表出されています。

新元号を迎えた我等も時代の変遷を見極めつつ、先生の当時の心情に思いを馳せて句作に励みたいと思います。

石田康明

# 安住敦の句

## 眼薬さす落花を仰ぐさまをして

『柿の木坂雑唄』昭和五十五年

昭和五十年作。春は風で埃の舞い上がる季節。それだけでなくとも眼のお悪くなられた敦師にとつて眼薬は欠かせないものだつたに違いない。

「落花を仰ぐさま」とは何と言ふ詩的表現なのだろうか。私もここ数年毎朝眼薬をさしているが、とてもこのような表現は生まれない。眼薬をさす所作の中にも敦師の深い詩心を発見できる御句です。

木村みどり

# 燈下集



○ 山内四郎

手の届くところに冬の屋根瓦  
春浅し黙りこくつて今日の空  
いもうとは姉より陽気春の宵  
草餅や妻が居らねばひとりぼっち  
菜の花や小学校は授業中

○ 園部落郷

鴨鳴くや人の嘘の声を出し  
ありあけや雪野にスーパームーン残る  
野地蔵の頭の出でてより雪解急  
雪解光外で髪梳く柚母子  
残る鴨家鴨と伍して歩きをり

○ 松橋利雄

こころ貧ならず北窓開きけり  
青饅や見込み違ひの苦笑ひ  
飛石の日向日影や落椿  
面影の師恩深むる朝桜  
花ぐもり野暮用多き日なりけり

○ 佐藤信子

母に似てよく笑ふ子や桃の花  
じつとしてをられぬ若さ風光る  
御集印帳の墨乾く間や蝶の昼  
待乳山一樹の桜老いにけり  
お下がりの春大根を横抱きに

○ 橘 正義

朝な朝なさんしゆゆ見入る喜びは  
陽炎へしかとわが足踏入れし  
黒光りしたり余寒の鴉どち  
あれこれと用はかどれり春夕焼  
我流なれどそれなりの露味憎なりし

○ 小林のり人

十戸の字少子長寿や海苔を搔く  
野尻湖の水面鏡やつばくらめ  
トンネルの東口白辛夷かな  
カーナビのきかぬ小路や更紗木瓜  
元号のあらたまる年さくらかな(令和)

○ 三上 程子

鳥交るはたきの瘦せてきたりけり  
春場所や鳥獣戯画の活気づく  
一番でもびりでもなくて卒業す  
虻出でて三遊間を守りけり  
数奇心ゆさぶる花や風の出で

○ 中野あぐり

芋環や手首細きは母に似て  
たんぼぼの絮の半円母の日なり  
はつなつやくらしの匂ふ藍木綿  
露の葉の風広々と曼陀羅図  
泰山木一花一指も触れしめず

○ 大嶋 洋子

竹秋の水仕の音や修行僧  
教会の昼告ぐる鐘鳥雲に  
平穏な暮し大事や花種まく  
鳥雲にはらからすでに二人欠き  
水温むめだかの影の走りけり

○ 綱 徳女

イチロー引退アスパラガスの茹で上がる  
めばる釣り来し息子の料る夕餉かな  
如月や寝付かれぬ夜の白湯なりし  
母の赤幼き記憶呼びもどす  
レース編む刻ゆるやかに流れけり

○ 中村嵐楓子

おいそれと変はらぬ性根蠅汁

一礼し雲水余寒ただよはず

春昼にとろりとしぼり出されたる

パイ皮のごとくに崩れ春の闇

さす手より引く手に春の愁ひかな

○ 鷹崎由未子

眉引きて夫なき春の薄化粧

夕桜二人の頃の椅子と卓

在りし日のままの楽譜や春暖炉

春愁やいづくに住むも飯の宿

万華鏡過去ゆつくりと花となる

○ 小張昭一

点し合ふころの明かり冬牡丹

三越で第九合唱春隣

成田屋の豆を拾ひに節分会

差別なき地球にしやう針納

令和天皇御代永らへと鯉幟

○ 鈴木鳳来

学舎と別るる日なり牡丹の芽

靖国の御魂鎮むる初ざくら

破れ寺の首欠地藏や春疾風

青饅に故郷恋しと思ひけり

まあなんと岡崎城の桜かな

○ 松本峰春

サーカス小屋たたまれ紫雲英田の広し

雛飾り終へて一日は温和な児

旧暦まで飾られ雛満足顔

廃校ゆゑ残る昭和ぞ椿落つ

その山彦笑うてばかりうららけし

○ 木村傘休

下陰や浦島草の深き黙

校庭に子の声高き桜かな

九十九谷の風を染めたり山桜

戦なき御代こそ良けれ山桜

改元の空どこまでも風光る

# 余言

安立公彦

こころ貧ならず北窓開きけり

松橋 利雄

「北窓開く」の季語は、都会に暮らしている人達には実感に遠いものだが、北国の皆さんにとつては、今もなお生活の一部となっていることと思う。如何にも春の到来を告げる生活感の伴う季語である。

この句、「こころ貧ならず」が善く効いている。毎日を誠実に生きることが、何よりも自分自身に対する律儀の思いと言えよう。「北窓開きけり」に、その思いが及んでいる。三月本部句会の特々選句。

さす手より引く手に春の愁ひかな

中村嵐楓子

「さす手」も「引く手」も、ともに「舞」の手振りを示す。差手引手の言葉もある。「舞」は、舞踊を舞と踊に分けた時の一方と辞書は記す。即ち、歌や音楽に合わせて、すり足などで舞台を回るのを舞と言い、踊は跳躍に基づく動作と記す。作者は高名な演出家だ。

この句を見ると、舞台の一場面が浮かぶ。和服姿の女優の舞。「引く手に春の愁ひかな」は、作者ならではの表現である。「春の愁ひ」がみごとに修まっている。

点し合ふこころの明かり冬牡丹

小張 昭一

牡丹は初夏の花だが、晩秋に咲くものもあり、春、その蕾を取って花期を遅らせ、藁の囲いをして寒中に咲かせたものを「寒牡丹、冬牡丹」と言う。写真で見る冬牡丹は、菰の中に真紅の花弁をひらき人を呼ぶ。

この句「点し合ふ」が善い、「こころの明かり」が善い。まさに「点し合ふ」である。夏の牡丹のような佳麗さは未だしたが、寄り添うような風情が、「こころの明かり」に通う。夫と妻の来し方を振り返った作品と言えよう。

彼岸会や庭の花との暮参り

小菅 礼子

春分の日を中日とし、前後三日の七日間を「彼岸」と称するのは周知のこと。秋の彼岸は秋彼岸。彼岸会は、その七日間に行われる仏事。但し単に暮参とあれば秋季である。「盂蘭盆」が秋の仏事であることに由来する。

この句、「彼岸云」とあるから、この暮参りは春の暮参となる。中七の「庭の花との」が善い。庭にはとりどりの花が咲いている。それを摘む作者。同時にこの中七には、



亡き夫との慕参の思いが、寄り添うように宿っている。

母に似る後ろ姿や目借時

豊谷 青峰

季語には一見珍奇と思われる言葉も多い。逃水、田鼠化して駕となる、山笑う、そしてこの目借時。春季だけでも色々ある。この「目借時」は「蛙の目借時」。春の暖かさの眠気を誘うこと。それは蛙が人の目を借りる故とある。作者の母もすでに故人なのか。街なかで、ふと前を歩く女性のうしろ姿が、生前の母と同じなのに気付く作者。こういう経験は誰にもある。この句、「目借時」が善い。季語を使い馴れた作品と言えよう。

北総の空へ芽ぶきの大櫨

中村紀美子

「松戸戸定郎」の前書がある。三月の末、紅俳句会で、千葉県松戸に吟行した折の句。松戸は常磐線の沿線の市。「戸定郎」は明治時代の徳川家の住まいの残る唯一の建物。徳川昭武により建設された。国指定重要文化財である。

周辺の地域から一段高い敷地は、広々として眺望も良い。その一画には、与謝野晶子の小振りな歌碑も幾つかある。木立の中に、歴史を伝える大櫨が亭々と聳えていた。遠く富士の姿も見える。今まさに芽吹きの大櫨だった。

み仏の小腹ほがみふくよか春の昼

宮崎 洋

この句の「小腹」は、ほがみ、と読む。「小腹が立つ」の場合は、こぼら。下腹のこと。上五に「み仏の」とある。仏像の下腹は大方がふくよかだ。手許にある『古寺古刹百選』を見ても、如来坐像、日向薬師、十一面観音立像、そして鎌倉の大仏、何れも「小腹ふくよか」だ。

この句、「み仏の」と、「小腹ふくよか」を結んだのがみごとだ。読み手を頷かせる表現と言えよう。「春の昼」も納得できる季語の斡旋である。

改元の空どこまでも風光る

木村 傘休

生かされて令和の御代の更衣

加藤 良子

残生を生くる令和や花おぼろ

卜部 黎子

今年の五月一日を以て我国の元号は「令和」となる。四月一日午前一時四十分、官房長官の翳す令和の文字は、見入る人それぞれの胸に、時代の移り変りの瞬間を色濃く刻んだ。万葉集の梅の花の和歌の序文を典拠とする。六月号の出句の中に「令和」の句が幾つかあった。その反応の素早さに敬意を表する。季語は夫々異なるが、「どこまでも」、「生かされて」、「残生を生くる」は、作者の思いとして納得出来る三句だ。いざ新しい出発である。

# 当月集

安立 公彦選



○ 中澤 弘

アネモネの香りを羽織る妻の居て

軍神のねむる川岸春の潮

納経の背にやさしや春日影

春雨や小庭の猫のしのび足

飛行兵士の眠る隅田や花筏

○ 近藤 真啓

風光るへうたん池に鯉の髭

クレパスで描く巨木や春の昼

交々の道へ影引き卒業子

けふよりは君もドクター桜鯛 祝・大雅君

花冷えや研究室の時計磨く

○ 佐藤 まさ子

苗札の一年一組大きな字

卒業生袴姿のハイヒール

記念写真卒業証書確と持ち

早咲きの桜マップの予想表

逃したる快速電車花曇

○ 山下 健治

春潮の波音とほし真砂女の忌

江戸の香の息づく苑や緑立つ (六義園四句)

大樹なす宙いつばいに糸桜

鳥雲に池畔に架かる渡月橋

春深き峠に眺む和歌の苑

○ 海村 禮子

生き生きと三月の山登るかな

君子蘭庭の一隅照らしけり

見上ぐるや夢果つる地の花曇 (福島原産地)

長閑けしやはるかに見ゆる彦根城

笑みたまふ鎌倉大仏春日なか

# 春燈の句

安立 公彦選

母逝きてはや若草の匂ひかな

東京 農野憲一郎

亀鳴くや土塊揉んでほぐしゐる

牡丹の芽群立ち燃ゆる太湖かな

喧騒の上海なるや霾れる

コサージュの母眩しくて入学児

兵庫 向井 芳子

しじみ蝶八十代の未来とは

春愁や波に流離ふ鳥の羽根

航路は西へ海のおぼろに消ゆる船

さよならのくると回す春日傘

埼玉 大谷満智子

子の手より風船空へ旅立ちぬ

山風のこぼしてゆきぬ糸桜

囀をあつめて擽大樹かな

笈一枚夫婦で分くる麗かや

東京 山本 泰人

亀鳴くや竹馬の友の古写真

街の灯の揺るる大川水ぬるむ

何事も無き終日や木の芽風

フリージア香る湯宿の古机

花筏アートの中の親子鳥

福井 西本 花音

トンネルを抜けて日矢差す春の海

母のくせ残んの帯や花衣

島虻や人より多き牛の数

竹林の闇を作れる落椿(寛政三句)

母子像に木洩れ日うすき春の寺

神奈川 辻 泰子

いにしへを刻む石段著莪の花

かたまつて歌うたふ如つくつくし

百姓はなべて早起き耕せり

如月やいまだ動かぬ花時計

畑の貌調へとのへ耕せり

京都 大槻 祐二

